

景観フォーラム

巻頭言

2014年FIFAワールドカップが世界中のサッカーファンを酔わせております。今回の南米ブラジル開催には、会場建設の遅れ、また開催そのものへの批判ということで、スタート以前から大変話題になっておりましたが、無事スタートするとその熱狂は大変なものです。個人的にはサッカーファンとは言えませんが、その試合ぶりを目の当たりにしますと、他のスポーツにはない何かを感じざるをえません。

世界には200を超える国家が存在します。オリンピックなどには年々参加国が増えているみたいですが、このワールドカップという単一なサッカーというスポーツ一つに、何故ここまで世界中の人々が熱狂できるのか不思議でなりません。もしかしたら、サッカーというスポーツそのものにその謎が隠れているのかもしれない。他のスポーツでは見られないサッカー選手の格闘技とまでも言える一つのボールを追って戦う姿と、それを見るサポーターの篤い応援合戦。そして、オフサイドという不思議なルールが、あつという間に選手を冷静に引き戻す。そこに何か人を酔わせる魅力が潜んでいるのかもしれない。

現代はグローバル社会といわれております。国家は形だけのものになりつつあり、国家対国家という対立よりも国家を動かす大企業群が国家の後ろに潜んでいるのでしょう。景観とそこで暮らすコミュニティの関係を考える場合、この大企業の存在をもっと研究しなければならない時代になっているのかもしれない。サッカー観戦をしておりますと、選手の後ろに世界を動かしている大企業の電飾が異様に輝いているのが気になります。(斉藤全彦)

〈予定〉

景観セミナー

- ・7月16日(水) 18:30~20:00
「私の風景 - 風景の詩」
- ・10月15日(水) 18:30~20:00
「府中市の景観整備」

景観まちあるき

- ・9月23日(火) 藤沢市湘南地区
- ・11月15日(土) 府中市内
- ・12月17日(水) 忘年会

理事会

- ・10月29日(水) JICA研究所
18:30~



お知らせ

前回 2014年 4月 会報誌でお知らせしたスタートアップウィークエンド (SW) 真鶴が6月20日 (金) ~22 (日) 無事開催され、盛会のうちに終えることが出来ました。当日の様子は神奈川県を起点とするいくつかのメディアでも取材を受けました。会期中は食事に地の物が振る舞われるなど、運営に当たって地元の方々のチーム力も大いに発揮されました。ここでは1つ、運営に深く関わった若者からのコメントを引いておきます。「この三日間確かに真鶴に新しい風が吹いてましたよ！」

また SWの運営主旨が、全世界各地での起業家コミュニティの醸成であり、それを受けて真鶴でも継続した運営がメンバー間で誓われました。まだ細部を詰める必要がありますが、今回は2014年 11月をターゲットとする予定です。★ 20日金曜日の様子を伝える神奈川新聞記事へ → <http://goo.gl/VM6Cho>

(このタイミングで開催されると優秀賞を取ったチームは、そのまま世界大会への進出を約束されるため。)

「真鶴発 世界へ直結」を具現化させるため、若者を中心とする地元関係者も火がついたようなので、皆様も引き続きの応援宜しくお願いします。SW真鶴Webサイト → <http://goo.gl/z10Dmm> (文責：角田)

VOICE

自分の『絵』について語る。 南口清二 (画家)

自分の『絵』について語る。これが意外と難しいのです。言葉で言えるなら『絵』を描く必要などないと言えないこともないのです。エクフラシスとして「詩は絵のごとくに」「絵は詩のごとくに」として画像をことばで描写する伝統は西洋にはあります。私の風景画の目指すものの根幹になるものとして、【見えるものの向こうにある見えないもの】をこそ見たいのです。

タルコフスキーのノスタルジアの有名な冒頭シーンにあるピエロデラフランチェスカの『出産の聖母』。この絵のある教会にどうしても行きたくて、トスカーナの旅に友人の車で出かけてみました。その絵はモンテルキの小さなお堂にあって、映画の教会はトスカニアのバジリカ・ディ・サンピエトロの地下の礼拝堂でした。そこの壁に

『出産の聖母』がはめ込まれる形で映像となっているのです。いわゆるモニタージュでした。この強いイメージは絵を作る上でも私との共通感覚として私に根付いています。私にとって風景は作るものなのです。さまざまな思いの複合なのです。

光に満ちた思い出の地ティパサに立ったカミュに再生への心情を吐露させた風景。なつかしい光、空気の匂いが心の奥底に響く、見えている色が生きている私を包み込むもろもろの経験。それらをこそ私の風景画の原点としたいのです。



VOICE

まちも本も人の思いでできている 東野允彦（出版社勤務）

はじめまして。私は出版社で編集をしております。福井に生まれ、学生時代は京都ではんまり過ごし、その後大阪でぼちぼち暮らそと思っていたら、数年前から東京在住。

私にとって、この日本景観フォーラムは関東のまちを深く知る場でもあります。自然環境だけでなく、まちはその土地の人となりを感じていると感じることが多く、興味深く感じられます。

まちづくりを考え、実践するこの場に参加したきっかけは、昨年出版した『人にやさしい会社—安全・安心、絆の経営—』の執筆者の1人である、斉藤全彦理事長です。同書で斉藤理事長は、景観まちづくりを通して、心の豊かさが実現できることを力強く主張します。文章から情熱的な方だと思っていましたが、お会いしたらもっと情熱的な方でひき込まれてしまいました。

会員みなさんも斉藤理事長以上に、景観への熱い思いをお持ちです。セミナーやまちあるき参加を通じて、今思うことはまちづくりも編集も同じ、かたちのないものを、まちや本というかたちにまとめる作業だということ。そして、情熱だけではだめだけど、情熱がなければつukれないこと。

みなさんとご一緒にまちづくりをし、本もつくれましたら幸いです。よろしくお願い申し上げます。



景観と情報 尾崎孝行（東京情報大学 4年）

皆様はじめまして。この度学生会員として入会させて頂くことになりました。東京情報大学4年の尾崎孝行と申します。また、Webページやメーリングリストなどの管理を担当させていただきます。

日本景観フォーラムに入会させて頂いたきっかけは、友人の紹介によるもので、それまで景観に関しては考えもしませんでした。しかし、セミナーなどに参加し、景観を通してその町の歴史や文化に触れ、多角的に景観について考えていく、この会に魅力を感じ、今後の活動が非常に楽しみになりました。

また、現在は情報学について学んでおりますが、情報発信以上の何らかの形で情報と景観を結び付け、この会での活動に活かしていきたいと考えております。

日本景観フォーラムは、私に新たな視点を与え、景観を通して成長できる場であると思います。まだまだ勉強不足ですが、皆様との交流を深め、魅力や可能性について考えていけたらと思っております。

どうぞよろしくお願い致します。



世界の景観めぐり 第6回 なぜヨーロッパの街並みは美しいのか？

NPO法人日本景観フォーラム 理事 (株) グローバル研修企画 代表 小林 均

今から30年ほど前、初めてパリを訪れた時の感動を今でも忘れない。シャルルドゴール空港からバスに乗って、パリまで行く途中の景色は、工場やビルなどが点在し、日本と変わらないものであった。しかし、パリの街区に入った途端、その様相は一変した。そこには映画で見たことのある19世紀、フランス革命の時代の街並みそのまま、なんら変わることなく現れた。しかも、そこには馬車が走っている訳ではなく、自動車が石畳みの道を他の都会と同じように走っている。これこそ100年以上前の町と現代都市がうまく融合している典型ではないかと、いたく感心させられた。

そして日本に帰国し、成田空港から東京までの高速道路を走るリムジンバスから見た街並みは、戸建て住宅とマンションやビルが雑然と立ち並ぶ、広告と電柱だらけの見るも無残な街並みだった。

ではなぜ、パリに限らず、ヨーロッパの街並みは美しいのか？という漠然たる疑問に対する答えを、人から聞き、写真で確認することによってある程度分かってきたので、ここでお伝えしたい。

理由1. 建物と建物の間に隙間がない。

下のドイツ・フライブルクの大聖堂前広場の写真を見てもらいたい。道に面した壁面（ファサード）以外は、隣の建物と隙間がなく、くっついて建っている。ここでは8棟の建物が色と形が違うにもかかわらず、くっついている。この連続性が街並みを美しく見せている要因ではないか。他のなんでも良いからヨーロッパの街並みの写真を見てもらいたい。道路に面した壁面以外は隣同士ついているはずである。日本の街並みを見ると、必ず建物と建物の間にわずかの隙間が空いている。この隙間は何の利用価値もなく、人が通ることもできず、ただゴミがたまっていくだけである。土地利用の効率から考えても大変な損をしているはずだ。



フライブルクの大聖堂前広場。後ろの建築物の並び方に注目。

理由2. 屋根の色が統一されている。

ヨーロッパの町で中心の塔や高台に上って、上から町を眺めるとその美しさに息をのむことが多い。その美しさの訳は、屋根の色が統一されていることにあると思う。下のヴェネチアの写真のようにほとんどの建物が、赤い瓦の屋根を持っている。郊外であればこの赤と樹木の緑の美しいコントラストの街並みを見ることができる。日本の街並みは、家々が好き勝手な色の屋根で統一感がなく、屋根のない建物も多いため、雑多な印象を受ける。



ヴェネチアの鐘楼から見た街並み。屋根の色が統一されている。

理由3、4、5・・・

その他の理由として、電柱がない、広告が規制されていて目立たない、自動販売機がない、などがあげられる。日本はヨーロッパの街並みから多くを学ばなければいけないと思う。

<LFJブックレビュー39>

『はじめてわかるルネサンス』 ジェリー・ブロン著

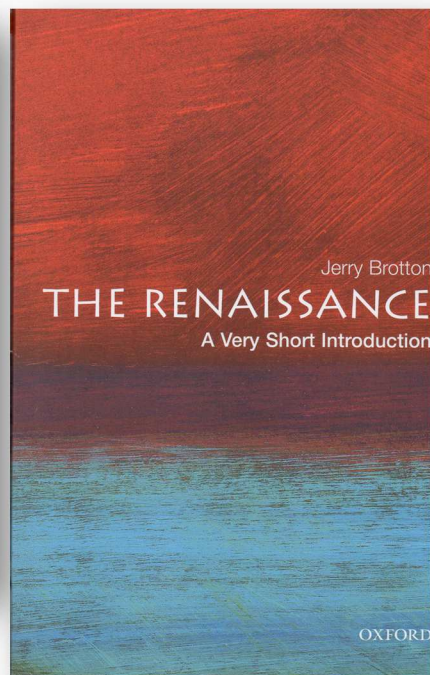
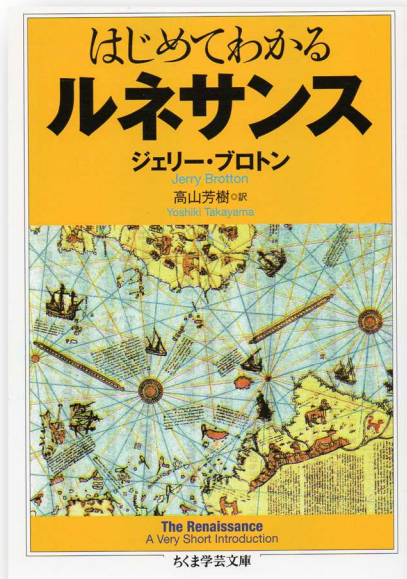
ちくま学芸文庫 原著初版2006年刊

景観を論ずるとき、常にキーワードとして脳裏をかすめるのは“近代化”というものである。古代から中世を通りぬけ、そして近代という大パノラマの時代を経験したのち現代が立ち現われるという歴史の流れは景観論の大きな重しとなっている。その中でもこの“近代化”という時代の大転換が景観に大きな影響を与えていることは言うまでもあるまい。従って、ある場所の景観を考える場合必ずと言ってその場所がどのように“近代化”されたかを問いかねばならなくなる。そして、この“近代化”の発端となったのが、14世紀から16世紀にかけて人類史に忽然と現れた「ルネサンス」というものである。

さて、現象としてルネサンスを考える場合、イタリア・ルネサンスが注目されるわけだが、「ルネサンスを語るに当たっては、地理的にも政治的にも、東方と西方を区切る境界線など存在しない」という立場を取る著者のルネサンス観は実に新しい指摘である。そして、ルネサンスは物心ともども発見の時代であったと共に「イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒たちは皆、政治的商業的な主導権獲得を目指して頻りに情報と思想のやり取りを行っていた」というようにルネサンス運動を齎した下地には国家などという境界はないことになる。そういう意味で、ルネサンスは現代のグローバリゼーションの走りとも言えなくもない。

この書の原題はThe Renaissance : A Very Short Introductionというものであるが、ルネサンスというものがヨーロッパという限られた地域だけの運動というのではなく、「世界規模のルネサンス」という章を設けて、「典型的なルネサンス理解の問題点は、ヨーロッパ文明が達成した業績ばかりを賞賛して他の地域については殆ど目を向けなかったことである」という見解により、従来のブルクハルト的ルネサンス観とは一線を画すスタイルを取っている。そういう意味で、新たな入門(Introduction)であるだろう。

20世紀はレヴィ＝ストロースの構造人類学を走りとして、正にこの欧米中心主義の反省からあらゆる考え方を見直す思想運動であったと思われるが、21世紀の現代、景観とコミュニティの関係を考察する場合、まだまだ欧米一辺倒の考え方に引きづられている感が否めない。それは何故だろうかという問いかけを發するとき、いま一度「近代化とは何か？」という問いかけをすべきではないだろうか。そして、その先駆けとなった人類史の大きな転換点であるルネサンスをもう一度鳥瞰するのが21世紀の現代ではないだろうか。(齊藤全彦)



富麗凶 phrase ② 「工事景観？」

「今日の仕事はつらかった〜♪」でもないが、帰宅するため渋谷駅で山手線に飛び乗ったら、電車が動かない。やがてアナウンスは「軌道内に人が立ち入ったために全線で運転を見合わせています」とのこと。「ふざけんな。どこの馬鹿が線路で電車を待っているんだ。こっちは腹を空かして一分一秒でも早く家に帰りたいっていうのに」。そこへまた「お客様を保護するために駅員が向かっています」だとか、「レスキュー隊が向かっていますのでしばらく停止します」で、仕方がないから山手線は諦めて、バス乗り場に向かった。そういえば、渋谷駅どこもかしこも工事で、ホームに到達するのも、駅から出るのもたいへんだ。全部完成するまでは10年とか20年とかかかるそうで、綺麗になった渋谷駅を見るまで生きていられるかどうかだ。すくなくとも通勤が続く間は工事景観を見続けることになるのだろう。

とにかく駅の改装工事はあちこちで行われており、これも経済活性化のための国策かどうか知らないが、これじゃ東京の景観はいつでも工事中だぜ。一つの建物が完成する頃には隣のビル工事が始まり、道路も鉄道も駅も改造される。駅舎や駅ビルの改装が終了しても、今度はその周辺のビルが老朽化し、建て替えの工事が始まる。高架線も陸橋も対応年数を超過して改築に入り工事。もちろんこれは渋谷駅だけの問題ではない。かつて江戸市中3箇所から出荷し、延焼により江戸の大半が被災し大火事のごとく、駅前再開発は拡大し東京の至る所でケンセツの火の手が上がる。

そうなれば、東京の景観、イコール工事中の景観であり、それこそ最も東京らしい景観ということになる。となるといつそのこと工事中の景観をよくする事を考えたほうがよい。建築工事用シートの色、作業員の服装、トラックやクレーン車の形状・デザイン、作業中の騒音を和らげる工夫もするべきだ。また、作業員や現場周辺に好感を持たれるように工夫するのも工事請負業者の役割ということにして、スピーカーを各所に設置し音楽を流す。そう曲はローエングリーンなんかがかかるかもしれないね。そうなるとう工事現場はリアルな劇場となる。派手な作業パフォーマンスがそこから生まれ東京市中に流布する。テレビでもワイドショーなどで毎日のように取り上げられる。AKB工事現場〇〇なども出現し、ヒットを飛ばすなど娯楽メディアを独占する。優れた工事景観と芸術性は映画にもなり、海外でも上映される。それが観光ポイントともなればビルの建設費用の一部を補填できるくらい収益を上げてしまふ。そうなるとう、さらに建設工事はますます盛んとなり、東京の主要駅は万年工事現場となる。不動産業者もオーナーも耐用年数を無視して、とにかく工事を優先、国もあわてて、規制に乗り出すがし、そんなの効果もなくどンドンスクラップアンドビルドでお祭り騒ぎ。そして、そのあげくはすべて「ジ・エンド」である。これは1967年にドアーズがヒットさせた名曲である。

さあ、みんなで歌おう。

This is the end, beautiful friend

This is the end, my only friend

The end of our elaborate plans

The end of everything that stands

The end

(Tポン)

↑ 参考資料

「東京新聞（夕刊）2014年4月11日付」

最終頁にて「大下藤次郎展」のご案内を添付させて頂きました。併せて、ご覧ください。

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL: **03(3780)3814**

FAX: **03(6379)6681**

E-mail: info@keikan-forum.com

URL: <http://keikan-forum.com/>



Landscape Forum of Japan

2014年(平成26年)4月11日(金曜日)

二〇二〇年の東京オリンピックとパラリンピックに向け、JSC(日本スポーツ振興センター)は国立競技場をこの七月から一年以上をかけて解体するとしている。

それに対し建築家の槇文彦氏が昨年(2013)の五輪招致決定前に「国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」という論考を建築専門誌に発表して建て替えに反対、以後、改修を求める声が高まっている。国立競技場の帰趨は、今後日本の景観をめぐる政策がどのように推移するのかが上り下りでも注目される。

景観とは個別の建築物の美しさではなく、それらが「集まり」として織りなすものである。たとえば日本橋が西洋の歴史的建造物の模造でしかなく、一方で首都高速道路は建築物としてのダイナミックさから価値が上回っていると見て、日本橋の上空に首都高が設置されたことを肯定する

景観政策を占う新国立競技場案

歴史遺産の遺棄なぜ?

人がいる。しかしそうした主張は個別の建築物の美しさに注目したにすぎず、「文脈」としての景観を見ていない。日本橋も首都高も建造物としてそれぞれ価値があるとしても、それらを重ねる景観は醜い。それはおいしいみそ汁においしいチヨコレートを混ぜるとまずくなるのと同じだ。ところが日本では戦後ながらへ、建築物の「文脈」としての景観を保全するよりも、新たに建築物を建てること優先された。周辺住民が景観の悪化を理由に起こしたいわゆる「景観訴訟」において、歴史的な建造物の維持を理由としない限り、まず住民側が敗訴してきた。



松原 隆一郎

京五輪招致委員会も、招致に際し会場を一九六四年東京五輪で使われた既存施設が集まる「ハリテッジ(遺産)ゾーン」と、臨海部の「東京ベイ

とする国際デザイン・コンクール(の審査委員会は、ザハ・ハイド氏による近未来的な形状を有するデザイン案を選定した。これは敷地いっぱい建てる予定であり、しかも高さがこれまでの十五層の規制をはるかに超える七十層超とされている。この選考に当たっては、委員会の強い意向が働いている。都市計画の専門家である柳沢厚氏によ

ての景観を保全するよりも、新たに建築物を建てること優先された。周辺住民が景観の悪化を理由に起こしたいわゆる「景観訴訟」において、歴史的な建造物の維持を理由としない限り、まず住民側が敗訴してきた。

しかし〇四年に景観法が成立、新たな建築に対する規制の強化が期待され、今回の東

ゾーン」の二群に分けるとしていた。これまでに景観が定着している区域と、新たに景観をつくり出すとする区域の二群である。それゆえ現存する国立競技場は壊さず改修したり、地区にかかわるさまざまな規制を踏襲したりすると期待された。

ところがJSCが二二年に設置した安藤忠雄氏を委員長とする国際デザイン・コンクールの審査委員会は、ザハ・ハイド氏による近未来的な形状を有するデザイン案を選定した。これは敷地いっぱい建てる予定であり、しかも高さがこれまでの十五層の規制をはるかに超える七十層超とされている。この選考に当たっては、委員会の強い意向が働いている。都市計画の専門家である柳沢厚氏によ

ると「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」公開勉強会、ザハ案は風致地区・高度制限に抵触している。たとえば高度地区は建築物の高さを二十層以下としている。しかし地区計画で高さ制限を定めれば適用除外となるといってもあり、ザハ案採後の一三年六月に急遽「七十五層」以下の地区計画が決定された。風致地区の条例も十五層

以下と定めているが、設置者が国の機関である場合は許可が不要とされている。 ということは、いずれの制限も委員会の意向で適用外とされたことになる。JSCは都の都市計画審議会等と事前に協議することが道義的には求められるが、それが行われなかった気配はない。歴史遺産としての景観は棄て去ることが予定されていたのだから。予算も当初の想定を一千億円単位で超過するとの試算もあり、赤字となった場合、JSCがどう負担するのかわからずはない。

斬新なザハ案はむしろ臨海部の「東京ベイゾーン」にこそふさわしい。委員会とJSCはなぜ、わざわざ神宮外苑の景観というハリテッジを遺棄する決断をしたのか。意図を開陳すべきだろう。(まじばら・りゅういちろう)東京大教授